大学の窓から 一学びの哲学を模索する一

Some Philosophies in University

田村 英之

Hideyuki TAMURA

- 1932年7月生まれ
- 1956年九州大学機械工学科卒業, 1961年同大学院退学, 同年同学講師, 1975年同学教授, 同学工学部動力機械工学科において機械力学とくに非線形振動問題の理論, 応用, 計算法, 実験などに関する教育/研究に従事
- 正員, 九州大学工学部 (〒812 福岡市東区箱崎6-10-1)

1. 大学革命のミニ史考

20世紀があと8年とすこしで終わろうとしている今, 宇宙創生から2億 (2×10^8) 世紀, 人類の誕生から2千 (2×10^3) 世紀の時間が流れたことになる。産業革命や地球規模の政変による世界史の書き替えから2世紀が経ち, 不幸なパールハーバーは半世紀前, 大学紛争は0.2世紀昔の話となった。…世紀とは人間の寿命単位でもある。

明治維新は, $(1+1/4)$ 世紀前になるが, 遅ればせに近代国家の仲間入りを果たした新生日本帝国の教育制度は, 当時, 今で言う発展途上国さながらの『追い付け追い越せ』的非常手段であったに違いない。旧制の大学制度は, ほぼ1世紀前に出現し, 以後の半世紀は緩やかな成長を続けつつ世界大戦の終戦 (1945年) に至る。

戦後, いわゆる学制改革による新制大学の誕生が日本の大学制度の第一次革命でもあろうか。その後は学生数の倍増に次ぐ倍増で, 20年経った1970年ごろには, 旧制大学時代に比べて, 大学生の人口は10倍増と言われた。つまり, 昔は同世代の若者の30人に1人が大学生であったのに対し3人に1人の割合となった。さらに20年経った今まではもう2人に1人以上でもあろうか。

新制大学と同時に発足したはずの大学院のほう

は, 少し遅れ気味ながらも成長は進み, 修士大学院は着々と, 博士後期課程は, ここ数年の間に急速に充実され, この20年間で大学院の学生数は3倍増と言われている。

現在, 社会人へ開かれた大学 (院) や生涯学習, 大学院大学へ格上げ運動などの動きがにわかには活発化しつつあり, 第一次革命から後の半世紀に近い今, 大学制度の第二次革命の条件が急速に醸成されつつあるように見受けられる。

2. 今, 大学に期待することは

一体, 大学とは何だろう。個人にとって, 社会にとって, また親にとって子にとって。さらには企業にとっても大学自身にとっても, 1世紀前の大学制度創設の初心は, 今どうなっているのか, あるいはどう変質したのか。そもそも教育という事業が国家的社会的規模の産業として要請され, またそれが成立しているのはなぜだろうか。

もっと手近な問題として, 学生諸君は何を考えて日々を勤しんでいるのだろう。また我々教官は何が目的で教育に研究に情熱を傾けているのか。大学を象牙の塔と評する向きの, 学問がひたすら純粹で真理の探求が無条件に価値あるものとする考えは, 無論, 盾の半面の真実に過ぎない。人は就職のために大学進学を目指すのも厳然たる真実であるし, 社会や企業は有能な人材や技術者の育成を大学の当然の機能として期待している。

永遠の真理と目前の世俗的現実, 建て前と本音, はたまた機械工学と総合技術, スペシャリストとジェネラリスト, 深化と拡大, 理系人間と文系人間…。このように見えてくると, どうやら, こ

れら一見矛盾する特性のいずれにも偏せず公平に調和することが大きな目標のように見える。空間的・時間的な人間宇宙にちりばめられた無数の星々のすべてにくまなく関心を持ち、すべてを考え学ぶこと、少なくともその努力をすること…『追い付け追い越せ』の呪縛から自らを解放し、指導人としての総合学術と専門人としての高度の技能とを粗と精の調和として、ゆとりある学習を行うこと、そして常識人としての情/理あるいは真/善/美の協調を目指すことこそが、21世紀に向かう大学の、また、一個人としても、より人間らしい学びの基本姿勢のように思われる。

3. 教育と研究のせめぎあいの場

大学という名の産業の労働者である教官の業務上の基本的問題の一つに、教育と研究のバランスがある。教育機関である大学の任務は教育と研究といい（何故か研究と教育とは言わないが、ときにはこれが区別できない人もいる）、どうしてこの両者が一体なのか、研究なるものが、なぜ無条件に大学で価値あるものと位置付けられるのか…大学教師のビデオレコーダ化が嘆かれ逆採点必要の陰口もある中で、研究がどのように教育と直結すべきなのか…すこしこだわって考えはじめると不透明な観がないでもない。

教育の一面を、職業訓練ととらえるならば、急進的な最先端の研究成果をただちに講義の内容に反映させるのは疑問である。最先端でも少々未定着の内容を、ゆるぎない定説との区別が付き兼ねる若者に直接伝授するのは危険でさえある。学生がまず基礎として学ぶべきことは、限りなく壮麗な未来がその上に立脚しても微動だにしない完璧に安定化した古典のほうであろうし、研究作業を通じて学生が学ぶことがあるとすれば、それは、未知なるものに挑戦する際の身構え、手探りの手法、方法論、それと（最も大切な）感動の実感であり、極言すれば、その具体的専門内容はあまり問うべきではなかろう。

そのように考えると、貴重な時間とお金を消費して研究に血道をあげる理由が少々わからなくなる。産業最前線における問題の解決や斬新な技術の開発が大学の使命だとすれば現在の環境は少し

疑問である。企業さんの下請け業に全面的にのめりこんでしまったり、あるいは逆に、コストパフォーマンスのさだかでない趣味や道楽にうつつを抜かしたのでは、本務としての、学生への教育業務の位置付けはどうなるのだろう。

大学の持つ図書館的あるいは博物館的な資料センターの特質を十二分に発揮し、問題解決に必要な情報を適切に選択整理し、色分け味付けして供給する…その辺までが節度ではないか、また教育と研究の絶妙な連携プレーの実現にもっと努力することが肝要ではないかと思われる。

違和の根源は、研究業績（のみ？）が勤務評定に直結する点にあり、ここでもまた『追い付け追い越せ』の呪いが滞留しているように見える。

4. 大学を巣立つ若者たちへ

春爛漫、大学の学窓から社会へと旅立つ諸君は、大学という企業の主力製品であり商品でもある。企業側としては品質管理に十分意を尽くし性能保証にも留意したつもりであるが、出荷の終わった今、安堵とともに一抹の不安がないわけではない。欠陥製品が混っているかも知れないことは、諸君自身のほうがよく知っているだろう。

かなりの諸君は、大学受験時代（あるいはもっと以前）から『（受け身型）追い付け…』ビールズに感染し人間性喪失シンドロームが慢性化した疑似患者の可能性がある。今やそれを自覚し、それを振り払う努力を始めるべき時期が到来したことを直感してほしいものである。

学園から社会へ、守りから攻めの学習へ、集団教育から各自の自主的分散教育へ、その内容はより広くより深く…同時に実質上の未成年から成人への変質…諸君の内面の最も大なる変革は、これまで社会の被保護者＝ゲストの立場であったものが、今日からは社会の富の生産と維持の責任を直接担う産業戦力＝ホストとなるべきことであり、まさに、ものの見方とらえ方のコペルニクス的反転である。それが、これまで何度か繰り返してきた卒業と根本的に異なる大学の卒業なのだということを強く認識すべきであろう。

（原稿受付 1991年12月19日）